

『妙劔神社の話』

一、亀に乗ってきた神様

千野町の妙劔白石神社が、合祀されるずっと昔の話です。

妙劔神社の神様は、亀に乗っておいでになったといひます。その時乗ってきた亀を放養した池を、「亀田」といひ、今も神社の後ろに残されています。



私らが子どもの頃、丘陵に沿って幅一〇間、長さ六〇間ほどの間に、湿田を挟んで「ドブツキ原」と呼ぶ沼がありました。おそらく、この沼を指すのでしょう。雑草が茂る中に、ところどころ井戸跡のような穴がありました。私らがキ大将たちは、長さ二間ほどの竹竿を持って行って、「その穴を突くと、ウナギが出る。」といひて突いたものでした。ところが、ウナギが出るどころか、竹竿が底まで届かなかったのです。ほんとうに深い穴でした。それを見ていた大人の人たちから、「あぶない。」といひて、ひどく叱られたものでした。

残念なことに、昭和四十二年、七尾市が誘致した会社の敷地造成のため、この「亀田」は、消えてしまいました。

二、光る神宝

昔、妙劔神社は、七尾の方へ向いていました。神社の森は、うっそうとしていましたが、社務所の後ろに、とりわけ大きな松の木がありました。その松の木は、浜からも見えたといひます。

海が、千野の方まで入っていた頃でした。ある船頭が、この松の木を目印にして、千野へ向かっていました。ところが、神社から出る光がまぶしくて、船をなかなか入れることができませんでした。それは、「神宝の妙劔」が放つ光でした。これでは、船の出入りに差し支えるといひるので、神社の向きを、くるりと今の向きに変えることになりました。

棟札によると、神社の建立は、元禄七年とありますから、このころ、向きを変えたと思われまひす。

三、神宝の妙劔

昔、国分寺の境内に、大蛇が住んでいました。それを、助さん（五右衛門）が退治しました。その時使った刀の刃がこぼれたので、近づいてみると、大蛇が刀を飲み込んでいました。その刀を取り出してみると、「千野」の銘があり、「神宝の妙劔」でした。この刀を振ると、空を飛んでいる鳥も落ちたといひます。

この立派な刀を、畠山の殿様の家来が使っていました。殿様は、それを見て欲しくなり、その家来を殺してしまいました。その後、畠山の殿様も滅びてしまいました

(千野町 塚林 祐三)